

岬馬の生態

～都井岬の野生馬たち～

串間市 主任文化財専門員

秋 田 優

目次

- 一 はじめに
- 二 都井岬の野生馬（再野生化馬群）
- 三 野生馬の社会
- 四 都井岬の自然環境
- 五 人間生活との共存による里山的自然環境
- 六 自然教材としての都井岬
- 七 おわりに

一 はじめに

宮崎県の最南端に位置する串間市の都井岬には、『岬馬（みさきうま）』と呼ばれる野生馬が生息している。青い海と緑の草原に馬の群れが草を食み、時には雄馬が雌をめぐり激しく戦い、時には馬が道路を我が物顔で横断する。馬といえば、柵に囲われた牧場が一般的である現代の日本に、こんな場所が残されているとは。都井岬は、私が宮崎へ移住する大きな要因となった場所である。



図1 都井岬の風景



図2 雄馬の闘争行動

岬馬は、一般には野生馬と呼ばれるが、元々は家畜だった馬たちである。ウマという動物は、古くから世界中で家畜として利用されてきたため、純粋な野生動物としてのウマはすでに地球上から姿を消している（世界最後の野生馬であるモウコノウマも、野生下では一度絶滅しており、世界の動物園等で飼育されていた個体を野生に戻す試みが続けられている）。アメリカ大陸のマスタングなど、野生馬と呼ばれるウマは海外にもあるが、これらも厳密には家畜から野生に戻って『再野生化』をした馬である。都井岬も、江戸時代に高鍋藩の軍馬の生産牧場として始まったと伝えられる。現在では、串間市内で馬の群れが見られるのは都井岬だけであるが、江戸時代の串間には80ヶ所以上の牧場があり、6千頭を超える馬たちが居たと伝えられ、大変な馬産地であったようだ。

串間市には、馬をモチーフとしたデザインが街のいたる所にある（図3）、いま流行りの『ゆるキャラ』も馬のキャラクターが誕生している（図4）。そうした『馬の町』としての歴史がある場所に、



図3 馬がデザインされたマンホール

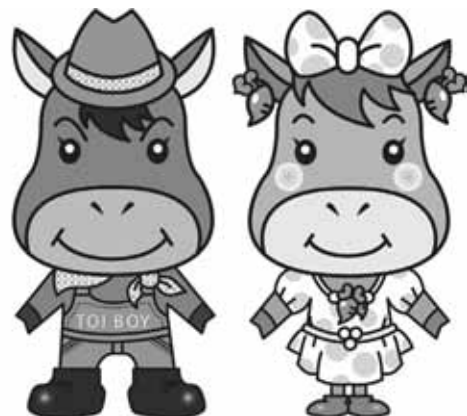


図4 都井岬のゆるキャラ（とい君・みさきちゃん）

都井岬のような楽園が残っているというのは、なんとも素敵な話ではないか。

岬馬は先述の通り、江戸時代から続く武士の馬が、ほぼ当時の姿のまま現代まで残っている日本の馬である（日本在来馬と呼ばれる）。現代の日本では、我々の身近で馬といえば、サラブレッドなど海外の大型馬ばかりであり、テレビの時代劇にもスタイルの良い馬が出演している。それらの馬と比べれば、岬馬は非常に小さく感じるが、この馬の歴史を考えれば、『江戸時代の武士が実際に乗っていたのはこのような馬であったか？』と考えることができる、由緒正しき日本の馬なのである。

こうした日本の馬は現在、全国各地に細々と残されており、北海道和種馬（道産子）、山梨や長野の木曾馬、四国・愛媛の野間馬、長崎県対馬の対州馬、岬馬、鹿児島の特産馬、沖縄の離島に生息する宮古馬と与那国馬で、これら8地域の馬を日本在来馬と呼んでいる。いずれの馬も、遺伝子的には地域個体群程度の違いしかないが、それぞれの地域で使用方法や成り立ちに違いがあることで、その体格には大きな違いが見られて大変興味深い。

この在来馬の中で、飼養されることなく野生化して現代まで残ったのは岬馬だけであるが、同じ在来馬である道産子や木曾馬と比較すると、岬馬は足が細くシャープな体型を有している。これは馬の利用法が、昔は武士の乗馬用だったが、近代は農耕馬の使い方が主流となった為、家畜として使役されていた他の在来馬は、体型が荷駄型に変わったのではないかと推察される。野生化して、使役されることなく残った岬馬は、当時の武士が乗っていた乗系馬の体型を残していると考えられるのである。岬馬は、馬としては唯一の国指定天然記念物であるが、野生化馬が珍しいというだけでなく、こうした形態的な特徴も、岬馬の価値を高めている。



図5 岬馬の体型



図6 乗馬に使用される木曾馬の体型

江戸時代から続く岬馬であるが、そのルーツをさらに大昔まで辿ると、また面白い話がある。日本列島にウマの骨が見られるようになるのは弥生時代からで、それより古い地層からはウマの骨が見られないことから、岬馬たちの祖先もこの頃に大陸から導入された動物ではないかと考えられている。モンゴルの大草原には、アジアの原始的な馬であるモウコノウマが生息しているが、モウコノウマの背中に注目すると、背骨に沿って色の濃い毛が生えて、タテガミから尾の付け根まで線が入るといった変わった特徴が見られる（鰻線：まんせん）。ここで岬馬の背中に注目してみると、岬馬にもこの鰻線がみられるのである。人間の蒙古斑ではないが、岬馬もモンゴル系の遺伝的影響を



図7 モウコノウマの鰻線



図8 岬馬の鰻線

受けていることが、この特徴をみればわかるのである。このように素敵な由来がある岬馬だが、今回は私が宮崎へ移住するきっかけとなった、この岬馬と都井岬の魅力について、ご紹介をさせていただきます。

二 都井岬の野生馬（再野生化馬群）

都井岬は、面積約 550ha（草地 100ha・森林 450ha）に現在約 90 頭の岬馬が生息している。江戸時代に軍馬の生産牧場として始まった都井岬では、開設当初から粗放な飼養法によって、雄雌を周年自由放牧・自然繁殖させ、子馬の生産が行われていた。元々は家畜だったとはいえ、自給率 100%の天然野草を活用し、手間や費用をかけずに子馬を生産することが目的であり、生まれてくる子馬を捕獲して出荷する、というスタイルであったから、現代の牧場で馬を飼うのとは異なり、ほぼ今の都井岬と同じような環境で自由に放牧されていたと考えられる。

ここで、岬馬の体サイズについてご紹介すると、体高（地面から馬の肩まで）は約 130cm、体重は 250kg～300kg 程度である。これが競走馬のサラブレッドでは、体高 160cm 以上で、体重は 450kg～500kg を超える馬もある。これらの馬に比べてしまえば、岬馬は非常に小さく感じるだろう。よく『ポニー』という言葉があるが、これはウマと動物種が異なる訳ではなく、単に大きさを馬の種類を分けた言葉である。体高が 147cm 以下のウマをポニーと呼び、それより大きいウマをホースと呼ぶ外国の基準なのだ。この基準に当てはめてしまえば、日本馬はすべてポニーになってしまう。

しかし日本在来馬の魅力は、彼らがこの国の気候風土で生き残ってきた動物達であり、この土地に適した頑強な馬であるという事だ。我々が海外旅行で体調を崩し易いのと同じように、海外から導入された動物にはデリケートなものが多く、その分ケアが必要となることが多い。私自身、大学生の頃に研究用の岬馬の飼育担当をしたことがあったが、馬を触ったことも無い素人が数年間飼育して、1度も獣医に診てもらおうような事はなかった。加えて、昔は日本人も小さかったであろうから、岬馬のサイズと頑強さは、日本人の家畜として非常に扱い易かったのではないだろうか。

岬馬は、誰にも拘束されず、好きな時に好きな場所で草を食べ、ウマという動物本来の行動パターンで生活をしている。牧場で飼育された馬が一般的である現代において、これは非常に稀有な存在である。彼らの生活を観察していると、牛飲馬食の言葉の通り、まずは食べている姿ばかりが印象に残る。岬馬は、一度食事を始めると、3～4時間も続けて勤勉に草を食べる。その後、小一時間ほど浅く短く、まどろむように休息したかと思えば、再び3～4時間も食べ続け、このサイクルを1日中繰り返している。夜中も目が覚めれば食べ続けて、食事の時間は1日に18時間を超える。一般の方に解説すると、『野草で栄養が低いから、食べ続けなければいけないのか？可哀そうだ』という御心配の声を頂く事もあるのだが、実はこれがウマ本来の生活パターンなのだ。

生物は、それぞれ種によって、どのような作戦で生き残ってゆくかという『進化の戦略』が異なる。同じ草食動物で、ウシとウマを比較すると解りやすい。ウシは、大きな胃袋に植物を食い溜めするが、この胃袋は発酵タンクになっている。微生物に植物を利用させ、利用し難い固い繊維は吐き戻して噛み砕き、再び呑み込んで発酵させる。消化の能力を高め、栄養効率で有利になろうという戦略であり、これがウシの『反芻行動』と呼ばれるものである。一方で、ウマは反芻動物ではない。ウマが選択した進化の戦略は栄養効率ではなく、危険な時に走って逃げることであった。敵に出会った時には、いつでも食事を中断して走って逃げる。走るためには、ウシのように大きな胃袋は邪魔になる。ウマの体は、走るために洗練されて、どんどんシャープな体型となった。ウマは大きな胃袋が持てなかったために、食い溜めができないので、常に少しずつ食べ続けて暮らす、という生活パターンになったのである。消化能力が低い為、馬フンには草の繊維が多く含まれる。これは、利用し難い固い繊維は早々にあきらめて排出し、お腹を空にして次の草を食べることで、量で質を補うような、燃費の悪いスポーツカーがウマなのである。走る能力に特化したことで、ウマは栄養効率を犠牲にした格好である。

ウマ本来の行動様式に基づいて馬を飼うならば、可能な限り放牧をさせるか、または1日に複数回に分けて給餌を頻繁にすることが望ましいと考えられる。しかし、これはなかなか困難である。1日の給餌回数は、多い牧場でも3～4回であろう。改良された飼料や牧草であれば、少量でも生理的な栄養要求量は満たすことができる。しかし、すぐに食べ終わってしまえば、前述の『常に少しずつ食べ続けたい』という行動欲求が満たされないことで、馬はストレスを感じることが多い。口寂しくなり、馬小屋の柵をかじってしまう等『悪癖（あくへき）』が発生するのは、こうした原因によるものである。当然ながら、好きな時に草を食べられる岬馬では、こうした悪癖は見られない。都井岬は、ウマが馬らしく本来の生活ができる楽園なのだ。

100頭規模の野生化馬が生息し、かつ観光地でもある都井岬は、野生に近いウマ科動物の社会を気軽に観察できる場所として、全国的に貴重なフィールドとなっている。岬馬の研究は、宮崎大学農学部が伝統的に担ってきたが、私の手元には岬馬の家系図の情報が、約60年分の連続データとして存在しており、これは世界にも誇れる貴重な財産である。岬馬の戸籍情報は、1頭ごとの馬たちのストーリー、人生の情報を豊かにしてくれる。これまでずっと独身だった雄馬が、最近やっと奥さんをもらったとか、または同じ雌馬を兄弟で奪い合っているだとか、こうした『馬人生』の

話を現場で展開できることは、大きな魅力である。現在の都井岬では、これらの研究成果も活用しながら、研究対象としてだけでなく、観光客向けのエコツアー商品としての活用や、教育教材としての利用も試みられている。

三 野生馬の社会

岬馬は、一夫多妻のハーレム群を形成して生活しているが、同じハーレムの雌個体間には、年齢と有意な相関のある順位性が見られ、採食や飲水など危険を伴わない日常生活の移動では年齢の高い雌が群れを先導する傾向にある。都井岬には多様な自然環境があり、年上の雌馬は、この自然環境に対する経験が豊富にあるため（例えば水場へ行くにはどこを歩くのが安全か、この季節にはどこへ行けば良い餌場があるか等）、その経験に基づいて、あくまで利己的に動いているのではないかと考えられる。他の雌たちは、この経験豊富な年上の雌に追従することで、都井岬の自然環境に対する知識と経験は次世代に受け継がれてゆく。このとき、雄は何をしているかというと、雌の集団が先に立って移動するため、雄は群れの後ろから追従し、子馬など遅れたメンバーが居れば、その移動を促すように追い立てる。群れがどこへ向かうかの舵取り役を年上の雌が担い、雄は家族を動かすモーター役をしていると考えれば、なにやら人間社会に通じる部分もあって、大変興味深い。

春は繁殖の季節であり、毎年10頭～15頭の子馬が生まれる。春に出産するのは気候が温暖で青草が豊富に生産され始める季節だからである。出産が遅れば、梅雨や夏の暑熱によって子馬が衰弱する恐れもあるため、春に出産する事は母馬にとって重要な戦略である。ここでは出産も自然分娩であるため、人間が立ち会うことはなく、すべて母馬が自分一人の力で出産して育て、それが300年以上も続いているのである。図9は、生まれたばかりの子馬が、立ち上がろうと奮闘している写真である。都井岬は本当に、命の営みを身近に感じることができる場所である。



図9 生まれて間もない子馬

子馬の背景にある白い物は、後産である。ここでこの後産については、子育ての方法によって、同じ草食動物でも後産を食べる・食べない、という違いがあることが知られている。一般的に馬の子育てはフォローワー（follower）と呼ばれ、子馬はすぐに立ち上がれるので、出産後はすぐ子供を連れて歩き、その場を立ち去ることができる。こうした動物では、出産後の後産はそのまま残される場合が多い。一方、牛などの子育て法はハインダー（hinder）と呼ばれる。子牛は地面に座って休むことが多く、藪の中で子牛を隠し、母牛は子供を残して草を食べに出かけ、授乳

のときに子供の所へ戻って来るというスタイルである。こうした動物では、出産後の後産は母親によって食べられることが多いようである。

馬は約 11 ヶ月の妊娠期間があるため、仮に来年も春に出産しようとした場合は、すぐ次の交尾をしなければ来年の出産がずれ込むことになる。ゆえに春は子馬の季節であると同時に、雄馬にとっては雌をめぐる争う恋の季節でもある。

この時期は雄の闘争行動が頻繁に観察されるが、それには一連の様式が見られて興味深い。最初は雄同士が鼻を突き合わせ、鼻息でコミュニケーションから始まり、次に噛みついたり、蹴ったりと物理的な闘争がおこなわれ、最後は相手に向かってお互いが尻を向けて、馬フンをして終了する。闘争が発生した場所には、両者の馬フンが山のように残されて、馬フンをした後は必ずフンの臭いを確認してから（図 10）、その溜めフン場を一時的な軍事境界線のようにして、両者は再び離れてゆく。岬馬は、フンの臭いで群れの違いを識別しており、闘争の後に両者がフンをするのは、臭いを残すためのマーキング行動であると考えられる。都井岬の草原を散策すると、明らかに 1 頭分の量ではない『馬フンの山』を見かけることがあるが、これはハーレムの雄馬たちが作ったものだったのだ。

繁殖期の岬馬は、他にも興味深い行動を見せてくれる。雄は、自身のハーレムに属する雌の排泄物を見つけると、臭いを確認し、そこへ自身の尿をかけるという大変奇妙な行動をする。雌の排泄物中には、繁殖に関する臭いの情報が含まれていると考えられ（発情しているか等）、この情報を公開しておけば、周辺の雄が狙って浮気をかける心配がある。事実、近年は岬馬の血液を採取して遺伝子を解析し、父親と子供の関係を調査する研究も行われているが、群れで生まれてくる子馬がハーレム雄の実子である割合は、全体の 7 割程度という結果がある。他の 3 割は浮気が成立しているという事で、雄は臭いの強い『雄の尿』を使って、雌の情報を必死に隠蔽しているのではないかと考えられている。



図 10 互いのフンを確認する雄馬



図 11 子馬の食フン行動

馬の子供は春に生まれるので『春駒』と呼ばれる。子馬は誕生から 1 時間ほどで立ち上がり、2～3 ヶ月で草を食べ始めるようになるが、生後一週間ほどの子馬を観察すると、また興味深い行動が見られる。母馬の新鮮な馬フンを見つけると、臭いを確認し、少しだけ食べるのである（図

11)。ウマなどの草食動物では、植物を消化する微生物を消化管内に共生させているが、子馬は生後、母馬の新鮮なフンを摂取することによって、この微生物を受け取っているのだ。食フンは、同じ草食動物でもウシなどの反芻動物では見られない。前述のように、ウシは胃の内容物を吐き戻す『反芻行動』により、胃袋の微生物が常に口内まで到達している為、母牛が子牛を舐める等の日常的な接触で微生物が受け継がれ、食糞の必要がないのだ。一方、ウマは反芻動物ではない為、消化管内の微生物を受け取るにはフンから摂取するしかないのである。以上のように、春は野生馬の興味深い行動が多く見られ、観察には一番適した季節である。

四 都井岬の自然環境

都井岬は、11月下旬頃までシバの生産があり、馬もその頃まではハーレムの形成を維持する。シバが枯死する冬季になると、群れは複数のグループに分かれて常緑広葉樹林内へ移住して、樹木食となる。タブノキ、アカメガシワ、ハドノキ等が採食されるが、イネ科の嗜好性も依然として強く、枯死したノシバやタケ類もよく採食される。

冬の岬馬がハーレム群を解散するのは、冬の餌条件が厳しいことが要因として挙げられる。岬馬にとって、シバの生産があるときは、これが最も利用しやすい資源である。一口は少ないかもしれないが、一度地面に口を付ければ、まるでトウモロコシを食べるかのよう、ずっと食べ続けることができるので、総合的に考えれば非常に多くの草を効率よく食べられるのだ。しかし冬になると、そのシバが枯れて失われてしまうので、馬は食糧を求めて森へ移住する。森林は、遠くから見ると緑が豊富に見えるが、森の中に入ってみると、実は馬の口が届く範囲には植物が少ないことに気づかされる。地面は暗くて草が少なく、食べられる樹木であっても、馬の口が届く範囲でなければ利用することができない。馬にとって森林は、意外と餌が少ない厳しい環境なのである。

一か所に多くの資源があることにより、動物は初めて集団を維持することが可能となるが、これは人間における経済社会と都市の人口にも同じことが言えるかもしれない。冬の岬馬は、一度家族を解散して、来年の春までを生き抜くため、厳しい『出稼ぎ』に森へ向かうのである。そうして冬を生き抜いた馬だけが、来年の春に再び草原へ戻り、繁殖に参加できるのである。

それでも、冬の都井岬にまったく餌が無い訳ではなく、このスタイルで300年以上も続いてきたのである。降雪は非常に稀であり、冬季も馬を人里に下ろす必要がなく、周年自由放牧が可能であった都井岬の環境は、岬馬が野生状態に近い社会を形成する一助となったのではないだろうか。

都井岬では岬馬ばかりが目立ちはちだが、その他にも面白い動植物が共存している。イノシシやアナグマ、ニホンザル、イタチ、ノウサギなど様々な哺乳類が生息しており、馬フンを観察すれば、動物のフンを好んで発生する糞虫や、糞生菌などのキノコも見ることができる。岬馬は、1日に生重量で約20kgの馬フンを排出しており、全体では約2トンの馬フンが毎日生産される計算である。これを人間が処理する事はないので、前述の分解者の働きによって、馬フンは土へと還されている。さらにこの馬フンを観察すると、植物の芽生えを見ることが出来る。岬馬は一方向的に植物

を食べて傷つけるだけではなくて、種子を飲み込んで運んでいる。移動した先でフンをすれば、これは肥料付きの種子を散布する事と同じで、岬馬は緑を広げる役割もしている訳である。



図 12 センチコガネ (糞虫)



図 13 糞生菌と植物の芽吹き

都井岬は岬馬だけでなく、その土地も天然記念物として文化財指定され、保護されてきた。ゆえに都井岬には、絶滅危惧種の植物も豊富に存在している。春に咲くオキナグサを筆頭に、フナバラソウ、ボンテンカ、ノヒメユリ、ムラサキセンブリなど非常に豊富である。ここで、都井岬の絶滅危惧植物にはいくつかの特徴がある。まず一つは、馬が食べない植物であること。前述のオキナグサもキンポウゲ科の毒草であり、馬が食べないから残されている。そしてもう一つは、よく開けた日当たりの良い草原を好む、草原性の絶滅危惧植物が多いことである。

岬馬は、生重量で1日約40kgの草を食べると推計されている。全体で推計すれば、毎日約4トンの草が消えている訳で、岬馬の草原管理能力は大変なものである。逆に、それを養えるだけの膨大な草が毎日生産されているということであり、仮に岬馬が絶滅すれば、岬の美しい草原は僅か数年で深い藪に覆われてしまうと考えられる。そうなればオキナグサのように草原を好む植物は、藪に覆われて生育できない。都井岬の希少植物たちは、馬が管理する草原で、馬と共に生き残ってきたのである。



図 14 オキナグサ (翁草)



図 15 ノヒメユリ (野姫百合)

五 人間生活との共存による里山的自然環境

都井岬の美しい草原を守るには、岬馬の存在が必要不可欠である。しかし厳密には、馬だけでこの風景を維持する事も不可能である。なぜなら、馬が食べない毒草など(不食草)が残るからである。都井岬では、江戸時代から現代に至るまで、馬を守る牧場の人々の活動により、夏には不食草の草刈り、冬には野焼きが行われてきた。もしこの活動がなければ、都井岬には馬の不食草がはびこり、草原は藪に覆われてしまう。前述のオキナグサも、やはり消えてしまう事になる。都井岬の美しい風景は、岬馬と、これを守る人々の共同作業によって保護されてきたのである。私たちは自然保護を考える時、自然に対する人間の影響は全て悪であると考えがちである。しかし現実には、人間がまったく手を付けずに守られる自然と、前述のように人々の生活の歴史によって守られる自然もある。

本来が森の国である日本では、植物の生育が旺盛である為、野焼きや草刈りなど、里山的な管理がされなければ草原は維持できない。ゆえに日本の草原は、私たちの祖先が森を開拓し、その生活の歴史と共に守られてきた環境なのである。そう考えると、都井岬の環境の全ては、ここで馬を養うという人間活動がなければ存在しなかったものであり、この都井岬の環境そのものが、地域の歴史文化であるとも言える。閉鎖された環境で、300年以上も草原が維持されてきた都井岬は、草原生態系の循環型エコシステムのモデルとしても、大変興味深い場所だ。



図 16 都井岬の野焼き



図 17 斜面に群生するオキナグサ

六 自然教材としての都井岬

野生化馬の研究フィールドとして歴史のある都井岬では、古くから馬の個体識別がなされ、戸籍と家系図は半世紀以上も記録があることは前に述べたが、これを背景とした研究計画や、教材活用、観光ガイドができることは大きな魅力である。個体が識別されていることにより、特定の馬を追跡観察したり、馬ごとの人生を語ったり、といった活用方法が可能となるため、これが子供たち向けの教材としても大変有用である。

近年は環境教育の意識が高まり、各地で様々な自然体験のメニューが実施をされているが、草原環境である都井岬は、馬の観察が非常に容易である。足元も開けているために、森林内や水辺の体験に比べれば、安全対策がし易いことも利点だろう。都井岬内には立派な県道が整備されているので、遠足のように気軽な装備で、子供たちを野生馬の近くまで連れてゆくことが可能である（図18）。

また、都井岬は観光地でもあり、馬が良い意味で人慣れをしている。団体に観察をしても、野生動物のように逃げられる事がなく、餌も与えないため、飼育動物のようにヒトに関心を示さない。これが観光牧場の馬であれば、人間に世話をされているため、ヒトを見れば餌をねだるなどして寄って来ることだろう。『ふれあい体験』のメニューであればそれでも良いが、野生馬の普段どおりの姿を観察したい場合には都合が悪い。観察者の存在が、動物本来の行動に影響を与え難いという特徴は、フィールドワーク入門編の観察対象として最適である。最近では宮崎大学の学生も、



図18 地元小学校の授業風景



図19 野生馬の観察（宮崎大学農学部）

動物行動学や草地生態学の野外講座で、都井岬を訪れることが恒例となっている（図19）。

いくら日本の馬が小さいと言っても、岬馬を間近で観察すれば、やはりその存在感は犬猫の比ではない。体の大きさ、鼻息の荒々しさ、草をむしる音、汗のニオイ、地面に響く蹄の音。のどかに見えて、岬馬も立派な大型動物だ。もし仮に素手で喧嘩をすれば、とても勝てそうにない迫力がある。身近な動物と言えば、犬猫など小型の愛玩動物が主流である現代において、そうした馬から受ける良い意味での『プレッシャー』は、子供たちにどのように響くだろうか。昆虫もカメも、犬も猫も1つの命。馬も同じ1つの命なのだが、そこには人間の力では勝手にし難い、大きな命の重みや尊厳のようなものを強く感じるの、私だけだろうか。

都井岬で教材となりうるのは、岬馬を中心とした自然環境の全てである。前述の糞虫たちは子供によって大きく反応が異なる。興味津々で、自ら馬フンの山を探し始める子供もあれば、馬フンを食べる虫が嫌いで、苦笑いする子供もある。しかしここで、『馬フンを食べる虫なんて気持ち悪いから、殺虫剤で殺してしまおうか』と問いかけると、子供たちは少し考えてから、『都井岬が馬フンだらけになれば、馬が困ると思います』という嬉しい答えが返ってきた。

哺乳類と昆虫、まったく違う生物であっても、同じ環境を共有する生物たちは、なにかしら関わり合いを持って生きている可能性がある。ゆえに、何も関係が無いと思って行った行為で、思わぬところに影響が出る場合もある。岬馬が居なければ良質な草原が消えてしまう、オキナグサと馬との関係もそうだ。ここでは、難しい教科書を使わなくても、生態系が様々な要素で関係し合って成立しているというイメージを、子供たちに体感してもらうことができるのだ。馬を中心とする動植物の営みが観察できる都井岬は、その環境全てが、設備費不要の『箱物でない自然博物館』と言えるだろう。

七 おわりに

都井岬の馬たちは、一般的な飼育動物のように『産業』になっている訳ではない。それでは、こうした野生化馬という特殊な動物が、現代社会に存在する意義は何なのだろうか。

岬馬は野生状態にあるが、馬が亡くなった場合には、死亡記録をつけるだけで埋葬はせず、遺体はそのままの状態に安置される。ここには多様な生物が共存しており、岬馬も亡くなれば特別な存在ではなく、他の生物の資源として利用され、新しい命が育まれる。岬を散策すると、白く分解された馬の骨を見かけることもある。ここでは本当に、身近なところで命の『始まりから終わり』まで見る事ができる。

『野生に生きる岬馬と、牧場で飼っている馬は、どちらが長生きだと思いますか』。小学校の授業で、子供たちにこんな質問をしてみた。すると意外と多くの児童から、『野生に生きている岬馬のほうが、自由でストレスが無いから長生きだと思う』という答えが返ってきた。しかし動物の寿命というのは当然、現代人も同じだが、食べ物と医療で簡単に変わってしまうので、単純な寿命の長さで言えば、岬馬のほうが短いし、死亡率も高い。毎年生まれる可愛い子馬は、満1歳を迎えるまでに全体の3～4割が亡くなる、大変厳しい世界である。

これはおそらく、近年の『自然派ブーム』の弊害ではないかと感じる。とにかく、自然なら手放しに何でも素晴らしいというイメージが、子供たちにあったのではないか。確かに岬馬は、好きな時に好きなものを食べ、好きな相手と子孫を残せるという、生命本来の姿に近い自由があるが、餌は自分で採らないといけない、あるいは体調を崩したら強くなければ生き残れないというように、自由である代わりに、生きる厳しさもある。一方で飼育動物は、自由に子孫を残せないという、本来の生命のあり方に対して不自由を課す代わりに、伴侶動物として、多少人間の思い込みかもしれないが、幸せに飼ってあげる責任が、我々にはあるだろう。ここまでくると、生物学から、命を考える道德教育のようなテーマも扱うことになる。

こうした話の展開は、仮に世界中の馬がすべて牧場の馬だけになってしまえば、我々人間が馬を見る目も、『馬という動物は柵に囲われて2～3頭だけ飼われた状態が当然の姿だ』という固定観念ができてしまう恐れがある。しかし都井岬のように、異なる馬も存在することにより初めて、飼育環境の馬と自然状態の馬の違いに気づき、馬にとってはどちらが良いのだろうか悩むことが、

教材になることもあるだろう。私たち人間が、馬を多面的にとらえるためにも、様々な形の馬として、馬のあり方にも多様性があるべきではないだろうか。

私にとって馬という動物は、純粋に好きな動物の対象であった。走るために洗練された体と、群れ社会で培われた高い知能やコミュニケーション能力は、他の動物とは異なる神秘的な印象があった。しかし同時に、私にとっては、ヒトの手が及ばない野生動物に神聖なカッコ良さを感じることもあり、仮に野生の馬が居ればどんなに素晴らしいかと考えながら、自分の将来の進路を模索していた。都井岬を知るまでは、身近な世界で馬といえば競馬や乗馬クラブの世界しかなく、馬好きの受け皿は他に無いのかと、路頭に迷いかけていた時に、出会ったのが都井岬の岬馬であった。岬馬が現代に生き残っていたことで、私も生きる場を与えられた。そうした想いで、現在ではこの馬たちの価値啓発と保護活動を仕事にするまでになった。

野生化馬は少数派ではあるが、少数派だからこそ、残す価値のある馬たちだと強く感じる。私はこの都井岬で、岬馬と都井岬の価値を啓発し、発信してゆくことにより、競馬や乗馬とは異なる『第三の馬』として、野生化馬が現代社会に価値を認められる可能性に挑戦をしたいと考えている。今回の寄稿が、また多くの皆様に都井岬へお越し頂ける機会となれば幸いである。



図 20 子馬の寝顔